

英語における衰退動詞の使役交替

高 橋 直 子

1. はじめに

影山(2001)は「脱使役化は日本語では生起するが、英語では生起しない」とし、西脇(2000)のデータと議論を使ってそれを主張しようとした。一方、この影山と谷脇の議論に対して、林(2014)は「英語の衰退を表すような動詞(以下衰退動詞(verbs of decadence)と呼ぶ)、例えば、yellow(黄ばむ)、fade(色あせる)、corrode(腐食する)などは、他動詞文から自動詞文に交替する際に使役交替を行い、脱使役化の操作に適応している可能性がある」と主張した。

この論文では、影山(2001)、西脇(2000)、林(2014)における議論を再分析し、衰退動詞が使役交替を生起させる可能性があるかどうかを検証する。そしてこの交替が脱使役化かどうかを確かめていく。さらに、都築(2010)の分析を使って、これらの衰退動詞がどのような種類の使役交替を表しているかを明らかにする。

第2節では先行研究として反使役化、脱使役化、衰退動詞に関する影山(2001)、谷脇(2000)、林(2014)の議論をまとめる。第3節では林(2014)による衰退動詞に対する分析を検証していく。そして、第4節では都築(2010)の議論に基づいて、衰退動詞の使役交替における特徴を分析していく。第5節でこの論文における議論をまとめる。

2. 使役交替と衰退動詞

2.1. 反使役化と脱使役化

(1)で示すように、動詞 **sleep** は (1a) では自動詞、(1b) では他動詞として用いられ、(1b) の他動詞用法の目的語 **the baby** が (1a) では自動詞用法の主語に変化するという使役交替を表している。そして **sleep**、**break**、**drop**、**open**、**slide** など、使役交替で生起することが出来る動詞を能格動詞と呼ぶ(影山 2001)。

- (1) a. 自動詞用法: **The baby** sleeps.
b. 他動詞用法: Mother sleeps **the baby** on its front.

(影山 2001:14)

また (2) においては、自発性を表す能格動詞の **break** は「自力で～した」という意味を補って、(2b) から (2a) に変化する際に自発性を含めた自動詞文を作ることが出来る。影山 (1996) はこの自発性を説明するために意味構造における「反使役化」というプロセスを示した。(3) にその構造を表した。

- (2) a. 自動詞：The vase broke.
b. 他動詞：Tom broke the vase.

(3) 反使役化

$$\langle x \text{ の活動} \rangle \rightarrow \langle y \text{ が変化} \rangle \rightarrow \langle y \text{ の状態} \rangle$$


$x = y$ (y 自体の活動によって y が変化状態になる)

(影山 2001:29)

(3) が示すように、反使役化とは「行為者 (x) と変化対象 (y) を同定すること」である。これにより「あたかも変化対象 (y) が自ら変化する」

という意味を含有することができる。そして影山は、行為者と変化対象が同一視可能なのは、主語に対して意味制限がほとんどないからであると説明している。

- (4) {John / The wind / The explosion / The hammer} broke the vase.

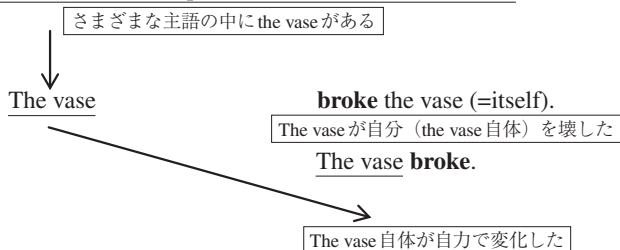
(Levin & Rappaport Hovav (L & RH) 1995:107)

上記の(4)が示すように、「他動詞breakの主語としてさまざまな名詞句が生起することができ、偶然に変化対象(この場合はthe vase)そのものが主語になることがあっても不思議ではないが、その場合、他力で変化するのではなく自力で変化するという意味になる」と影山は主張している。そして反使役化においては、この自発的な変化・内在的コントロールが重要だと述べている。

このことに関連して、都築(2010:82)は、「使役交替は操作・コントロールする必要性が相対的に少ない使役事態であり、意図的な働きかけ行為を伴った動作主を伴うことも可能であるが、その場合使役主の果たす役割は非常に小さく、人間が主語の場合でも偶然になされた行為として自然に解釈できる」としている。

林はこの影山が説明する反使役化のメカニズムを(4)の例文を使って以下のように図解した(林2014:8)。

- (5) {John / The wind / The explosion / The hammer / The vase} **broke** the vase.



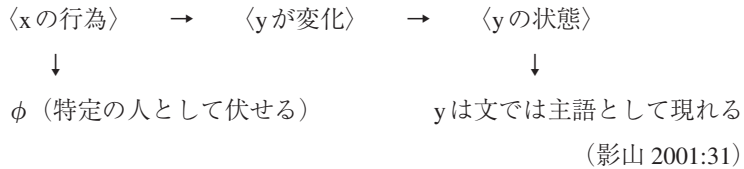
一方、脱使役化とは、能格動詞が他動詞用法から自動詞用法に変化する時、他動詞用法の目的語が自動詞用法では主語になり、動作主である主語が構造上隠れる操作を示す(影山 2001)。

自動詞か他動詞かを示す特別な接尾辞を持たない英語の動詞では、能格動詞の自他交替は上記のような「反使役化」が司っていると影山は主張する。しかし、作成動詞(make、build、writeなど)、殺人動詞(murderなど)、完全破壊動詞(destroy、demolishなど)やput、suspend、removeなどの動詞が表わす行為などは、どうしても外的な動作主が必要なため、外的使役を伴い反使役化が適応しない。この点に関して、影山は使役交替が接辞で表される日本語についてどう説明しているだろうか。

- (6) a. 彼は壁に絵をかけた。／ 壁に絵がかかった。
b. 彼が庭に桜の木を植えた。／ 庭に桜の木が植わった。
c. 国会は来年度の予算案を決めた。／ 予算案が決まった。
d. 彼は大金を儲けた。／ 大金が儲かった。(影山 2001:44)

各々のペアの左側が他動詞用法、右側が自動詞用法である。影山(2001)によれば、この自動詞用法の「絵がかかった」、「木が植えられた」、「案が決まった」、「金が儲かった」という事象においては、対象物が自発的に何かするということは考えられない。つまり(6)の例では左側の他動詞文を基に自動詞化したものが右側の文であると考えられる。さらに、絵が勝手に壁に掛かったり、木が勝手に庭に植わることはできないので、これらの動詞の自動詞化は反使役化とは別の操作であると考えられる。そして(6)の右側の例文の動詞は自動詞であるが、意味的には動作主の存在を含意している。影山はこの操作を「脱使役化」として意味構造を以下のように示している。

(7) 脱使役化



(7) が示すように、脱使役化とは他動詞用法から自動詞文用法に変わる時、意味構造における行為者を統語構造には表さない。つまり自動詞用法では動作主(使役主)が意味構造に隠れているという議論である。そして、この脱使役化は英語では生起せず、それを表すには下の例にあるように受身形を使うしかないと言山(2001:31)は主張している。(以下のa"とb"の各文は影山(2001:32)の例である。そしてc"の各文はそれらの例を基にして作成した。)

- (8) a. He planted a pine tree in the garden.
 a'. *A pine tree planted in the garden.
 a". A pine tree was planted in the garden. (植わる)
- b. He earned a lot of money.
 b'. *A lot of money earned.
 b". A lot of money was earned. (儲かる)
- c. They found the money.
 c'. *The money found.
 c". The money was found. (見つかる)

2.2. 衰退動詞による脱使役化の可能性

影山(2001:35)は「yellow(黄ばむ)、fade(色あせる)、corrode(腐食

する)といった状態変化を表す英語の非対格動詞は、外的使役を伴った他動詞としても用いることができるが、その場合の使役主は原因を表す自然界の出来事に限られ、意図的な動作主は主語になれない」と指摘した。そして、使役主が原因を表す自然界の出来事を用いた他動詞用法の文と、使役主が行為者である他動詞用法の非文を示した谷脇(2000)の例を示した。

- (9) a. The pages yellowed over the years. / The years yellowed the pages.
b. The drapes faded. / Sunshine faded the drapes.
c. The metal corroded. / Sea water corroded the metal.
- (10) a. *Terry yellowed the paper by spilling orange juice on it.
b. *My mother corroded the silver utensils by her careless treatment.
c. *The housewife faded the jeans by bleaching it.

(谷脇 2000:112)

この影山の議論と谷脇のデータに対して、林(2014)は「(10)のデータは非文ではなく、実際は文法的ではないか。そして、もし(10)における全文が文法的であるとしたら、これらの衰退動詞は脱使役化を表している可能性があるのではないか」と主張した。

林は(10)にある yellow (黄ばむ)、fade (色あせる)、corrode (腐食する)の衰退を表す3つの動詞の他に、新たに frost (霜枯れる)、dissolve (溶ける)、scorch (枯れる)、char (炭になる)の4つの動詞を加え¹⁾、1) 非能格自動詞文、2) 意図的な動作主を主語にした他動詞文、3) 意図的な動作主の意図性をさらに強調するため動詞句に副詞 *intentionally* を付け加えた他動詞文、4) 意図的な動作主を主語にした上で目的となる出来事が表わす不定詞や前置詞が文に含まれた他動詞文、の4種類の文を作成した。そしてこれらの衰退動詞が意図的な意志を含む動作主と生起できるかどうか、英語話者20人を対象に調査を行った。林はこれらの文の容認度の調査の中

で、判断基準として「G (可)、ok (ほぼ可)、? (どちらともいえない)、?? (ほぼ不可)、B (不可)」の5段階に分け、英語の母語話者に各文の容認度を判断してもらい、以下のような結果を報告している(林 2014:19-24) (例文 (11) ~ (17) は林 (2014) の (31) ~ (37) をそれぞれ表している。)

(11) a. The paper yellowed.

可: 40% ほぼ可: 15% どちらともいえない: 25% ほぼ不可: 5% 不可: 15%

b. Terry yellowed the paper by spilling orange juice on it.

可: 30% ほぼ可: 40% どちらともいえない: 5% ほぼ不可: 10% 不可: 10%

c. Terry intentionally yellowed the paper by spilling orange juice on it.

可: 55% ほぼ可: 15% どちらともいえない: 15% ほぼ不可: 15% 不可: 0%

d. Terry yellowed the paper to use it for his art product.

可: 45% ほぼ可: 30% どちらともいえない: 10% ほぼ不可: 10% 不可: 5%

(12) a. The silver utensils corroded.

可: 55% ほぼ可: 15% どちらともいえない: 15% ほぼ不可: 5% 不可: 10%

b. My mother corroded the silver utensils by her careless treatment.

可: 30% ほぼ可: 30% どちらともいえない: 15% ほぼ不可: 10% 不可: 15%

c. My mother intentionally corroded the silver utensils by her careless treatment.

可: 40% ほぼ可: 20% どちらともいえない: 30% ほぼ不可: 0% 不可: 10%

d. The director corroded his car to use it in his movie.

可: 40% ほぼ可: 25% どちらともいえない: 20% ほぼ不可: 0% 不可: 15%

(13) a. The jeans faded.

可: 60% ほぼ可: 30% どちらともいえない: 5% ほぼ不可: 0% 不可: 5%

b. The housewife faded the jeans by bleaching it.

可: 40% ほぼ可: 25% どちらともいえない: 15% ほぼ不可: 10% 不可: 10%

c. The housewife intentionally faded the jeans by bleaching it.

可: 25% ほぼ可: 20% どちらともいえない: 20% ほぼ不可: 15% 不可: 20%

d. Terry faded his jeans to look cool.

可: 35% ほぼ可: 25% どちらともいえない: 20% ほぼ不可: 10% 不可: 15%

- (14) a. The flower frosted in the refrigerator.
 可: 25 % ほぼ可: 25 % どちらともいえない: 20 % ほぼ不可: 15 % 不可: 15 %
- b. Mary frosted the flower by her careless treatment.
 可: 15 % ほぼ可: 20 % どちらともいえない: 25 % ほぼ不可: 15 % 不可: 20 %
- c. Mary intentionally frosted the flower.
 可: 25 % ほぼ可: 20 % どちらともいえない: 20 % ほぼ不可: 15 % 不可: 20 %
- d. Mary frosted the flower to wither it.
 可: 35 % ほぼ可: 20 % どちらともいえない: 20 % ほぼ不可: 10 % 不可: 15 %²
- (15) a. Ice dissolved into water.
 可: 45 % ほぼ可: 25 % どちらともいえない: 10 % ほぼ不可: 10 % 不可: 10 %
- b. John dissolved ice into water.
 可: 30 % ほぼ可: 25 % どちらともいえない: 30 % ほぼ不可: 5 % 不可: 10 %
- c. John intentionally dissolved ice into water.
 可: 30 % ほぼ可: 30 % どちらともいえない: 25 % ほぼ不可: 5 % 不可: 10 %
- d. John dissolved butter to make cookies.
 可: 15 % ほぼ可: 15 % どちらともいえない: 20 % ほぼ不可: 10 % 不可: 40 %
- (16) a. The sunflower scorched.³
 可: 5.2 % ほぼ可: 5.2 % どちらともいえない: 26.3 % ほぼ不可: 31.5 % 不可: 26.3 %
- b. Mary scorched the sunflowers by using agricultural chemicals.
 可: 35 % ほぼ可: 30 % どちらともいえない: 10 % ほぼ不可: 10 % 不可: 15 %
- c. Mary intentionally scorched the sunflowers by using agricultural chemicals.
 可: 30 % ほぼ可: 25 % どちらともいえない: 10 % ほぼ不可: 10 % 不可: 15 %
- d. Mary scorched the sunflower to plant another flowers.
 可: 15 % ほぼ可: 15 % どちらともいえない: 20 % ほぼ不可: 10 % 不可: 40 %
- (17) a. Mary's house charred.
 可: 10 % ほぼ可: 5 % どちらともいえない: 30 % ほぼ不可: 25 % 不可: 30 %
- b. John charred Mary's house by setting the house on fire.
 可: 45 % ほぼ可: 25 % どちらともいえない: 15 % ほぼ不可: 0 % 不可: 15 %

- c. John intentionally charred Mary's house by setting the house on fire.

可: 45% ほぼ可: 15% どちらともいえない: 10% ほぼ不可: 10% 不可: 15%

- d. John charred Mary's letter to hide their affair.

可: 50% ほぼ可: 15% どちらともいえない: 15% ほぼ不可: 0% 不可: 20%

上記の調査の結果、使役主が自然発生的でない意図的な動作主になっている各他動詞文の「可」及び「ほぼ可」を合わせた容認度の平均を集計すると、yellow 文は71.6%、corrode 文は61.6%、fade 文は76.6%、frost 文は45%、dissolve 文は48.3%、scorch 文は51.6%、char 文は63.3%であったと林は報告している。

林はこの結果を受けて「容認度が50%を切るものもあったが容認度は決して低くない」と主張した。そして、谷脇(2000:112)のデータについて「非対格動詞の中で、yellow(黄ばむ)、corrode(腐食する)、fade(色あせる)の3つの衰退動詞は他動詞用法で用いることができ、その場合、動作主(使役主)は原因を表す自然界の出来事に限られることはなく、意図的な動作主も主語になれる」と結論付けた。

林はこの仮説をさらに正確に確かめるために、衰態動詞を使って動作主(行為者)を統語構造に表さない自動詞文を追加で作ることにし、上記と同じ方法で調査を行った。

そして以下(18)の各文が表しているように、意味上の動作主(行為者)をはっきりさせるため、自動詞文の前にわざと動作主を明確にする表現を入れた。そして、続く自動詞文では、統語構造では意図的に動作主を表さないが、意味上では動作主の存在を示唆した自動詞文を置いて、それぞれの文の容認度を調べた(林 2014:27)。(以下の例文は林の(38)の例文である。)

- (18) a. Terry wanted a naturally colored paper to use the paper for his art products so he poured orange juice on the paper and then, **the paper yellowed**.

(テリーは彼自身の美術作品に自然な色の紙を使いたかったので、オレンジジュースを紙にこぼしてみたら紙が黄ばんだ。)

- b. A science teacher wanted to oxidize silver utensils in an experiment in his chemistry class and he put the silver utensils into hydrochloric acid and then, **the silver utensils** corroded.

(ある科学の先生は科学の実験で銀食器を酸化させたかったので、銀食器を塩酸につけてみたら銀食器が腐食した。)

- c. John wanted to have a pair of jeans which has a lighter color and he soaked the jeans in bleach, then **the jeans** faded.

(ジョンはもっと薄い色のジーンズが欲しかったので、ジーンズを漂白剤に浸してみたらジーンズが色褪せた。)

- d. Mary wanted dry-flowers, and she got advice from her friends about how to make dry-flowers and she put some flowers into the freezer, then, **the flower** frosted.

(メアリーはドライフラワーが欲しくて、友達からドライフラワーの作り方を教えてもらって、花を冷凍庫に入れてみたら花が霜枯れした。)

- e. John wanted to drink something cold, but the water faucet was broken, so he put ice into a pan and then, **the ice** dissolved into water.

(ジョンは何か冷たいものが飲みたかったが、蛇口が壊れていたので水をフライパンに乗せてみたら氷が水に溶けた。)

- f. Ken wanted to seed wheat, so he used agricultural chemicals then, **the sunflower** scorched.

(ケン是小麦を植えたかったので、農薬を使ってみたらヒマワリが枯れた。)

- g. Argos hates Mary so much, and he sets fire to her house then, **Mary's house** charred.

(アルゴスはメアリーのことが大嫌いだったので、彼女の家に火をつけようとした。そうしたら、メアリーの家は炭になった。)

そして調査結果として、上記(18)の各文の容認度(「可」と「ほぼ可」を文法的とした場合)は、yellow文は80%、corrode文は100%、fade文は90%、frost文は30%、dissolve文は90%、scorch文は20%、char文は20%、であったと林は報告している。

この結果を受けて、林は、「谷脇(2000:112)の述べる非対格動詞の中で、yellow(黄ばむ)、fade(色あせる)、corrode(腐食する)に代表される衰退動詞は、はっきりとした意図を表す動作主が他動詞文の主語の役割を果たすことができ、衰退動詞を用いた他動詞文から自動詞文への変化は、他力の存在を陰に隠して対象の変化のみを表す脱使役化の操作と適応している可能性が強い」と結論付けた。

以下第3章では、この林の「衰退動詞は脱使役化の操作と適応している」という分析を検証していくことにする。また、衰退動詞の意味構造はどのようなものか考察していく。

3. 使役動詞としての衰退動詞

3.1. 反使役化か脱使役化か

他動詞文から自動詞文が作られる操作に対する考え方は、先に述べたように、客体が自発性・内在的コントロールを含む反使役化と、動作主である行為者が統語構造には表れない脱使役化の二種類がある。そして「脱使役化は英語では生起しない」と影山(2001)は説明している。

もう一度、(3)にある影山の反使役化の説明を考えてみよう。以下に(3)を(19)としてもう一度示す。

(19) 反使役化

〈xの活動〉 → 〈yが変化〉 → 〈yの状態〉

↓

x = y (y自体の活動によってyが変化状態になる)

(影山 2001:29)

影山は、反使役化とは「行為者 (x) と変化対象 (y) を同定すること」であり、これにより「あたかも変化対象 (y) が自ら変化する」という意味を表わすことができるとしている。そして、行為者と変化対象が同一視可能なのは、主語に対して意味制限がほとんどないからであるとした。

一方、林は、衰退動詞の他動詞用法から自動詞用法への変化は「他力の存在を隠して対象の変化のみを表している」として脱使役化のプロセスを表しているとした。しかし、林の (11) ~ (17)、そして (18) の各文の容認度の結果を再度検証すると、実際は衰退動詞は主語に対して意味制限がない。(11) ~ (17)、(18) からのデータを分かりやすく見るために、谷脇と林の文法的な他動詞文の内、yellow 文、corrode 文、fade 文を再構成させて以下に示す。(a 文の各文は谷脇 (2000:112) から、b、c、d の各文は林 (2014:19-21) からのデータである。)

- (20) a. The years yellowed the pages.
b. Terry yellowed the paper by spilling orange juice on it.
c. Terry intentionally yellowed the paper by spilling orange juice on it.
d. Terry yellowed the paper to use it for his art product.
- (21) a. Sea water corroded the metal.
b. My mother corroded the silver utensils by her careless treatment.
c. My mother intentionally corroded the silver utensils by her careless treatment.
d. The director corroded his car to use it in his movie.
- (22) a. Sunshine faded the drapes.
b. The housewife faded the jeans by bleaching it.
c. ?The housewife intentionally faded the jeans by bleaching it. ⁴
d. Terry faded his jeans to look cool.

これらの他動詞文が表しているように、衰退動詞は主語に対する意味制限がほとんど存在しない。つまり、これらの衰退動詞は能格動詞であり、かつ衰退動詞を伴った自動詞文が他動詞文に変化する時、林の主張する「脱使役化が生起している」のではなく、「反使役化が起こっている」と考えられる。

3.2. 2種類の衰退動詞

林(2014)は、衰退動詞に関する調査結果でさらに注目すべきこととして、自動詞文の容認度に大きな差が出ていることを指摘した。以下の(23)に(11)のa文の自動詞文と容認度の結果を整理してもう一度示す。

(23) a. The paper yellowed.

可: 40% ほぼ可: 15% どちらともいえない: 25% ほぼ不可: 5% 不可: 15%

b. The silver utensils corroded.

可: 55% ほぼ可: 15% どちらともいえない: 15% ほぼ不可: 5% 不可: 10%

c. The jeans faded.

可: 60% ほぼ可: 30% どちらともいえない: 5% ほぼ不可: 0% 不可: 5%

d. The flower frosted in the refrigerator.

可: 25% ほぼ可: 25% どちらともいえない: 20% ほぼ不可: 15% 不可: 15%

e. Ice dissolved into water.

可: 45% ほぼ可: 25% どちらともいえない: 10% ほぼ不可: 10% 不可: 10%

f. The sunflower scorched.

可: 5.2% ほぼ可: 5.2% どちらともいえない: 26.3% ほぼ不可: 31.5% 不可: 26.3%¹

g. Mary's house charred.

可: 10% ほぼ可: 5% どちらともいえない: 30% ほぼ不可: 25% 不可: 30%

上記の(23)における自動詞文の容認度(「可」と「ほぼ可」を合わせた数値)の結果は、yellow文が55%、corrode文が70%、fade文が90%、frost文が50%、dissolve文が70%、scorch文が10.4%、char文が15%である。林はこの結果を踏まえて、扱った7つの動詞の容認度を比べるとおおまかに2つのカテゴリーに分けられるとした。それは、yellow、corrode、fade、dissolveの動詞群と、frost、scorch、charの動詞群である。以下では前者をyellow型衰退動詞、後者をscorch型衰退動詞と呼ぶことにする。

林はこの2つのカテゴリーにおける容認度がなぜ分かれるのかについて、分析を試みてはいるが、はっきりした説明はしていない。以下では都築(2010)の分析と結びつけてこの2つのカテゴリーを分析していく。

4. 行為型使役動詞か変化型使役動詞か

以下では都築(2010)の分析に基づいて、衰退動詞の特性についてさらに考察していく。

都築(2010:59)は、使役動詞は行為型使役動詞と変化型使役動詞に分かれると主張している。その内、行為型使役動詞は「典型的には使役者が道具などを使い、意図的に特定の変化を対象物に引き起こす事象を表し、これらの動詞を表す事態は動作主が決定的な役割を果たす使役事態である」としている。一方、変化型使役動詞は「行為型使役動詞と比べて使役主の果たす役割が相対的に低い使役事態を表し、事態の初めは使役者による働きかけがあるが、その後は自然に対象物の変化が進行する使役事態を表す」としている。

また都築(2010:62)は「意味の拡張、変化、事態認識の変化などにより、動詞が行為型から変化型に変化したり、変化型から行為型に変化したりすることがある」と主張している。

例えば以下の(24)にあるpeelやcleanといった動詞は基本が行為型であり、動作主である人間の関与が必要な使役動詞である。それゆえ、行為型動詞による使役事態を表していて自動詞用法は許されない(都築2010:62)。

- (24) a. Mary peeled the orange. (O'Grady 1980:64)
 a'. ?*The orange peeled. (O'Grady 1980:64)
 b. The waiter cleared the table. (L & RH 1995:104)
 b'. *The table cleared. (L & RH 1995:104)

一方、peelやcleanが動作主無しで「ペンキをはぐ」、「空を澄みわたらせる」という意味で用いられた場合、動作主である人間の関与を必要とせず、自然に起こる変化型動詞の事態を表していて、この場合には自動詞用法は許される（都築2010:62）。

- (25) a. They peeled the paint. (O'Grady 1980:64)
 a'. The paint peeled. (O'Grady 1980:64)
 b. The wind cleared the sky. (L & RH 1995:104)
 b'. The sky cleaned. (L & RH 1995:104)

また、都築は変化型使役動詞が行為型使役動詞的にも用いられる例としてbreakを挙げている。breakは通常変化型使役動詞として用いられるが、行為を伴った「約束・記録・規則・契約を破る」という意味で用いられると、自動詞用法は不可能になるという。

- (26) a. John broke his promise/the contract/the world record.
 a'. *His promise/The contract/The world record broke.
 (L & RH 1995:105)

このように、使役動詞には行為型と変化型があるとすると、使役交替を起こす衰退動詞についても行為型と変化型があると推察できる。

その仮説を確かめるために、上記で述べた衰退動詞の2つのカテゴリーに基づいて(18)の林(2014:27)文を整理したデータを、以下の(27)と

(28) に示す。(容認度が50%未満の文には「?」を付けた。)

(27) yellow 型衰退動詞

- a. Terry wanted a naturally colored paper to use the paper for his art products so he poured orange juice on the paper and then, **the paper** yellowed.
- b. A science teacher wanted to oxidize silver utensils in an experiment in his chemistry class and he put the silver utensils into hydrochloric acid and then, **the silver utensils** corroded.
- c. John wanted to have a pair of jeans which has a lighter color and he soaked the jeans in bleach, then **the jeans** faded.
- d. John wanted to drink something cold, but the water faucet was broken, so he put ice into a pan and then, **the ice** dissolved into water.

(28) scorch 型衰退動詞

- a. ? Mary wanted dry-flowers, and she got advice from her friends about how to make dry-flowers and she put some flowers into the freezer, then, **the flower** frosted.
- b. ? Ken wanted to seed wheat, so he used agricultural chemicals then, **the sunflower** scorched.
- c. ? Argos hates Mary so much, and he sets fire to her house then, **Mary's house** charred.

自動詞文の容認度が高い(27)のyellow型の衰退動詞の文は、事態の最初の段階において動作主が変化を起こすきっかけを表しているが、その後対象物が自然に進行していき、紙が自然に黄色に変化したり、銀食器が徐々に腐食したり、ジーンズの色が次第にあせたり、氷が水になる状態変化を表していると言える。つまり、これらの動詞は(25)におけるpeelやcleanのような「変化型使役動詞」であると考えられる。

一方、frost型衰退動詞の文はどのような事態を表しているのであろう。まず、scorchとcharという動詞について考えてみる。

(28b)では、scorchが表す「焦がす、枯らす」という動作主による意図的な動作の働きかけがあつて「焦がす、枯れる」という意味になると解釈できる。また、(28c)でも、charが表す「灰にする、黒焦げにする」という動作主による意図的な動作の働きかけがあつて「灰になる、黒焦げになる」という解釈できる。ただし、どちらの動詞も他動詞文は容認できるが、自動詞文の容認度がかなり低い。また、(16)のThe sunflower scorched.の文の容認度が約10%であったり、(17)にあるMary's house charred.という文の容認度も15%しかないということを考えると、これらの動詞を含む他動詞文は自動詞文と使役交替することがかなり困難であると言えるだろう。そして、これらの動詞を含んだ他動詞文の容認度の高さや自動詞文の容認度の低さから、これらの動詞は状態変化を表しているというより、むしろ動作主が意図的に特定の変化を引き起こす事態を表しており、(24)におけるpeelやcleanのような「行為型使役動詞」であると考えられる。

しかしながら、この2つの動詞が行為型使役動詞だとしても、(16)や(17)のデータから分かるように、都築の主張するような他動詞文から自動詞文への使役交替を完全に許さないわけではない。そして、この2つの動詞が使役交替を生起させる動詞であることはLevin(1993)も主張している。それ故、衰退動詞に対しては、行為型から変化型、変化型から行為型への意味解釈の変化は、比較的柔軟性を持つものであるとも考えられる。

問題は動詞frostの使役交替である。frostが同じく使役交替を起こす動詞

であることはLevin (1993) も主張しているが、frostがscorchやcharと異なるのは、まず自動詞文におけるfrostの容認度に揺れがあることである。(14a)においてはfrostの自動詞用法の容認度が50%だが、(18d)の自動詞文においては容認度は30%しかない。そうすると、frostが行為型使役動詞なのか変化型使役動詞なのか判断するのが困難になる。⁵

frostは意味上でも、自動詞としては「畑や窓を霜で覆われる」、他動詞としては「畑や窓を霜で覆う、植物を霜枯れさせる、霜害を与える、ガラスや金属をつや消しにする、ケーキに砂糖をまぶす」などの多様な意味がある。植物などを霜枯れさせるという状況であれば、事態の最初には動作主(使役者)による働きかけがあるが、その後は自然に対象物の変化が進行するという事態を表す変化型使役動詞の意味解釈ができるだろう。一方、ガラスや金属をつや消しにする、ケーキに砂糖をまぶすなどの状況では、意図的に特定の変化を対象物に引き起こす事態を表す行為型動詞の解釈が強くなると考えられる。つまり、frostは(26)にあるbreakのように、変化型使役動詞が行為型的としても用いられる例であるという可能性もある。この点については、今後の研究課題としておく。

このようにfrostに対する分析はまだ必要ではあるが、衰退動詞は都築(2010)の分析に基づいたカテゴリーを基にして、基本的に2つに分類できると言える。まとめると、yellow型衰退動詞が表す事態は、事態の最初の段階において動作主が行為を働きかけ、その後自然に対象物の変化が進行する状態変化を伴う変化型使役動詞であると考えられる。一方、scorch型衰退動詞が表す事態は、動作主である人間の関与が必要な使役事態である行為型使役動詞と考えられる。動詞frostについては変化型使役動詞であるのか行為型使役動詞であるのか、あるいは両方の特性を示すのかを今後さらに検証していく必要がある。

5. おわりに

衰退動詞はbreakやopenと同じように、能格動詞として他動詞から自動

詞に変化する際に反使役化の特異性を表す。さらに、使役動詞としての衰退動詞は行為型使役動詞と変化型使役動詞の2つのカテゴリーに分けることができるが、行為型から変化型、変化型から行為型へ変化するような二面性を持つものもあると考えられる。

これらの衰退動詞の研究については、他の要因、例えば都築（2010）が指摘するようなアスペクトの違いによる衰退動詞の容認度を分析したり、コーパスデータを使った研究が今後必要とされる。

注

- 1) Levin (1993) はこれら7つの動詞はすべて causative/inchoative alternation を起こす verbs of change of state であり、すべて使役交替を行う状態変化動詞であると分析している。
- 2) (14) における各文に対して、Paul Crane (2014 私信) から以下のようなコメントを得た。まず (14a) に対しては、以下の表現がより自然であろうと指摘した。

- (i) The flower frosted up in the refrigerator./ The flower got frosted in the refrigerator.
- (ii) Mary frosted the flower because of her careless treatment.

また、Crane は (14b) について、事態を想定することが困難なので、以下のような例文を用いると良いと指摘した。

- (iii) Mary had intentionally frosted the glass before she drank beer.

さらにCraneは(14d)についても、以下のような文の方が自然であると指摘した。

- (iv) Mary frosted the flower to cause it to wither it.

- 3) 林は (16a) におけるデータの数小数点であるのは、この問題に対して無回

答一つがあったことが理由であるとしている。

4) この他動詞文の容認度は45%で比較的低い(林 2014:21)。

5) 上記の注2) で述べたように、frostを用いた例文に不自然な表現が入っていたために、容認度の差が出たという可能性もある。

参考文献

- 林紀行. 2014. 『英語における脱使役化の可能性—意味的側面からの分析』 名古屋外国語大学 卒業論文.
- 影山太郎. 1996. 『動詞意味論』 くろしお出版.
- 影山太郎. 2001. 『日英対照 動詞の意味と構文』 大修館書店.
- Levin, Beth. 1993. *English verb classes and alternations*. Chicago: University of Chicago Press.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Havov. 1995. *Unaccusativity: At the syntax-lexical semantics interface*. Cambridge, Mass: MIT Press.
- O'Grady, William D. 1980. *The derived intransitive construction in English*. *Lingua* 52: 57-72.
- 谷脇康子. 2000. 「非対格自動詞の自他交替」『英米文学』44(1): 105-118. 関西学院大学英米文学会.
- 都築雅子. 2010. 「使役交替構文—加熱調理動詞の特異性」足立公也・都築雅子(編)『学校文法で語らなかった英語構文』55-86. 中京大学文化科学研究所.